

—ただキリストと共に歩む—

水戸無教會

編集 半田梅雄
第十号

十字架の決定

マタイ二七ノ一五、二六
マルコ二五ノ六、一五
ルカ二三ノ二七、二五

半田梅雄

新約聖書によれば、イエスの十字架を強く要求したのは、ピラトの前に集まった群衆であつた。そしてこれをそゝのかしたのは、祭司長や長老達である。

憎悪の火種は群衆の中に落され、少しあほられると、途方も無い惨酷、惨忍をあえて行う。これは恐らく平素抑圧されている何ものかへの反撥が、憎悪と結びついて爆発するからであろう。群衆は彼らの演ずる役割がどんなものであるか殆んど知らない。野獸に似た狂暴性はふれる相手を滅茶々にしないうちはおさまらないのである。何時の時代でも、煽動者はこの祭司長や長老たちの陰險さを持つてゐる。彼らは自己の権力の座を確保する為にあらゆる智慧をしぼつて群衆を利用する。しかし私たちが深く心にとめなければならぬのは、この時のイエスの立場と態度である。イエスがそのような立場に追い込まれる前に、これ

を防ぐことが不可能であつたとは考えられない。又適當な妥協によつて、時の権力と結びつき、群衆を彼の意図する方向に導く術がないわけではなかつたであろう。然るに彼はその何れにもよらず、人の常識よりみれば、最も馬鹿正直な珠算に合わない道えあえて進まれたのである。然も彼の態度には、英雄的な豪放さも、殉教者の如き悲壮さもみえなかつた。イエスが三年の伝道生活の中で最も愛したのは、彼ら飼うものなき群衆ではなかつたか。その愛する羊たちが、今狼となつて、自分を十字架につけよと叫ぶ。イエスはじつと眼をつむつた。祭司長と群衆にどれ丈差があるか。群衆が権力の座につく時、それは祭司長となり、祭司長、長老らから地位と若干の知識を取り去ればそれは群衆になるのである。所詮人間は父から離れた罪の子である。彼らは今得々と祭司長を演じ、長老を演じ、群衆を演

じている。それが悪魔におどらされて、滅亡への墓穴を掘つてゐることに気がつかない。最早この愚かさから彼らを救う道は唯一つしかない。それは人類の長き悪夢に止めをさす非常手段である。

十字架は用意された。イエスは厳しい父のみ顔の前に立たれた。すべての苦難と屈辱と絶望とが彼のの上に置かれた。今や暗黒は頂点に達し、宇宙は窒息しかけていた。然し、見よ！かの聖なる犠牲（いけにえ）の口から洩れた言葉は何であつたか。「父よ、彼らを許して下さい。彼らは何をしているのか、わかずにゐるのです。」かくてこの世の歴史は幕を閉じた。然しすべてが終わったのではない。イエスの死は、死としての意味より、彼が眞の支配者として登上する準備の時に外ならなかつた。死を越えた福音は、イエスの事実を語り続け、選びは間断なく行われる。選ばれた者は、誰はかるところなく、全能者を父と呼ぶことが可能となつたのである。

サタンの主張と隠謀(ハ)

「ヨブ記研究(六)」

大森孝夫

一章九、十節「ヨブあにもとむるところなくして神を畏れんや。汝彼とその家およびその一切の所有物の周囲に藩屏を設けたまふにあらずや。汝かれが手になすところを悉く成就せしめるがゆゑにその所有物地に遍し。」サタンはヨブの敬神は神の御利益に対する返礼に過ぎないと主張誹謗しました。そしてその真偽の実證をかく迫りました。「されど汝の手を伸べて彼の一切の所有物を撃ちたまへ、然らば必ず汝の面にむかひて汝を誣はん。」(十一節)前回学びました通り、之等のサタンの言は単なるヨブに対する侮辱ではなく、神に対する冒瀆の極なる言葉なのです。神の創造の中心である人に就いて、サタンは常にその美点を見ることなく、欠点、暗黒面をあばき出しては世に善人なすと嘲笑し続けて来たので

す。神、エホバは、先にそのサタンの言行を否定すべく八節に於て「汝心をもちひてわが僕ヨブを觀しや、彼のごとく完全くかつ正しく神を畏れ惡に遠ざかる人、世にあらざるなり。」と言われたのですが、今回もサタンの冷笑、侮蔑に對してあくまでも怒り給うことなく、而して斷乎と「視よ、彼の一切の所有物を汝の手に任す。唯かれの身に汝の手をつくる勿れ」(十二節)と申されました。かく神はサタンに對し罪なきヨブを裸(一ノ二十一)にし、ヨブの信仰の純、不純を試みんことを許されたのです。この神の御言葉は実に神がサタンに信仰の力の偉大さを示さんが為に神の名譽を賭けて(！)力強く発せられたものなのです。茲に於て私たちはあの筆舌に盡し難いヨブの苦難の原因が奈辺にあるやを發見することが出来ると思います。これ迄の天上の會議の模様、経過は地上に在るヨブ、三人の友人及びエリフたちには一切

不明であります(この点、ヨブの苦惱、悲痛に私は心から同情する)ヨブ記を学ぶ私たちには、ヨブの試練、災禍は皆神御自身から出たものであることを知るのです。即ち境遇の順逆、人生百般の出来事は凡て聖旨、摂理のうちにあることを知るのです。殊にヨブの苦難は罪の報いに非ずして神の信任厚きが故に聖意により神の僕としてサタンの言を碎き神の栄光をあげん為のものであることを学ぶことが出来ます。

矢内原先生の御教示の通り「神の恩恵によつて与えられ、人の心に宿つた信仰は全く真実で御利益を信するものではない。神なるが故に信じ、人なるが故に神を信する靈的な信頼と愛の關係」なのです。

ヨブの苦難は不信仰に陥らず、サタンを徹底的に敗退させ以て神の栄光をかゝり奉り眞の信仰を証明せんが為なのです。誠に肉の人は神の栄光を汚すことにより己の悲

慘、マイナスを恐れます。然し、キリストを信する信仰によつて義とされた者はゴデーの言の如く「従順にこの苦痛を忍ぶ時、神はこの虫の如き、神の御足の下に踏碎かるるにふさわしき我によつて、サタンに對し栄光ある勝利を得給うのであるかも知れない」また利益の為に非ずして「神御自身の為に神を愛し喜んで苦しむ事は我らが神に捧ぐる礼拝」である事を知り勇敢に信仰のよき戦をなすべきであると信じます。

聖靈降臨の

客觀的意義

「使徒行伝研究(七)」

半田梅雄

前回聖靈降臨の模様について、二章一節より四節までを学んだ。「聖靈の降臨」という異常現象は単に主觀的な体験のみに止まるものでないことが、五節以下に述べられている。即ち聖靈降臨が事実上に於て存在するか否か及びそ

それが如何なる意味を持つかは、その結果ひき起された客観的事実に照らして判断すれば一層容易である。

○五節「さてエルサレムには、天下のあらゆる国々から、信仰深いユダヤ人たちが来て住んでいたが、この物音に大ぜいの人が集まつて来て、彼らの生れ故郷の国語で、使徒たちが話しているのを、だれもかれも聞いてあつけに取られた。」

集まつてきた人々は、パルテヤ、メジヤ、エラム、メソポタミヤ、ユダヤ、カパドキヤ、ポント、アジヤ（小アジヤの西部湾岸地方）、フルギヤ、パンフリヤ、エジプト、リビヤのクレネに近き地方などに住む人々の外、ロマよりの旅人、ユダヤ人の改宗者、クレテ人、アラビヤ人などであった。これはロマ帝国の全版図を代表するに足る人々であった。そして同時に於てロマ帝国は世界を意味し、従つて彼らは全人類の代表者ということができる。

○こうして全人類の代表者注視の中に事件は次第に進展してゆく。更に、十二節まで使徒らが、各国語で神の大きな働きを述べ出したことは事実であることが明らかとなった。然し単に外国語を語つたという丈では、それが価値を持ち、力を有することにはならない。十三節には、しかしほかの人たちはあざ笑つて、あの人たちは、新しい酒に酔つているのだと言つたとある位である。これは我々とつて見逃すことの出来ない箇所である。

○聖霊が降るといふことは、他人のことなど少しも考えず、いゝ気持になつてお札を配つたり、信仰を強制したり、踊つて歩つたりすることでないのは勿論である。だからと言つて、平日は全く他の人々と変らない生活を過ごしながら、日曜日文教会にゆく人間になることでもない。勿論ギリシヤ語や英語、独語で聖書が読めるようになることゝも違ふ。

こゝで再び一章八節のイエスの言葉を思い起して頂きたい。「たゞ聖霊があなたがたにくだる時、あなたがたは力を受けて、エルサレム、ユダヤとサマリヤの全土、さらに地のはてまで、わたしの証人となるであらう。」イエス即ち神の子の証人となる。それも牧師のサラリーを誰かから貰う為、義理にする証言ではない。「力を受けて」である。「この世の力」ではない。「神の力」だ。

○かくて、聖霊降臨は先ず客観的事実として異国語で神の大いなる働きを使徒たちに述べさせた。その結果二つの反響が起つた。「驚き惑い」（七節一二節）と「あざ笑い」（一三節）である。この二つの態度は、その後の二千年の歴史に於て、キリスト教に対する反応の、重大な要素をなしている。精霊降臨は、キリストによる魂の目覚めであり、人生観と世界観の根本的な変革である。生命の原理が神の子の自覚として宇宙大

のひろがりを持つ時である。それは当然信者の内的経験のみに止まつてゐることが出来ない。どうしても自己の周囲え様々な形で「働きかけ」てゆくであらう。この「働きかけ」が第三者の見るキリスト教なのだ。反応は驚威や驚怖や疑惑となり、或は嘲笑となる。すべて知らない者の無理解が原因をなしている。キリスト者は信仰なき人々を理解することは出来る。然し未信者は完全にはキリスト者を理解出来ない。忍耐と寛容は、より多く愛し且理解する者の避け難い宿命なのである。そこにイエスの苦難と十字架の意義がある。ルカ二三の三四、ロマ三の二五に於て、私たちはこのことの切実な意義をさとるであらう。イエスによつてすべてが完うされ、道は開かれた。キリスト者の果敢なたゞかいと永遠的あかしがこゝに始まるのである。

ペテロ

(ヨハネ伝一・四一〜四二)

石原秀志

シモンは兄弟アンデレに連れられてイエスの所えやつて来た。

アンデレが「私達はいまメシヤに出会った。」と彼に告げたからである。ガリラヤの一介の漁師に過ぎないアンデレとシモンにとつても、イスラエルの救済者であるメシヤの到来こそは強い期待の中にあつたが、そのメシヤが来て、今己の兄弟であるアンデレを召し、アンデレはその最初の弟子とされる光榮を与えられた事を親しく聞いた時に、神の国の出現を待ち望んでいた人間シモンの心ははげしく揺り動かされたに相違ない。

かくてメシヤたるイエスの下に急ぎ集つたシモンに対して、親しみと慈しみの眼を注ぎ給うた主は、「ヨハネの子シモンよ、今日汝は私に会う事が出来た。汝は私の弟子と

なるであろう。私は汝を今日からケパ(=ペテロ)と呼ぼう」と告げられた。

ケパ！此の名を聞いてどんなにシモンは驚き且怪しんだであろう。何故メシヤは私をそんな風には呼ばれるのである。私の体軀からだろうか？私の風貌からだろうか？それとも私が生来頑固な男であることを知つて居られるからであろうか？

シモンにはよくその意味がわからなかつた。そして同時に、彼は自分自身が如何なる人間であるかもわかつていなかったのであつた。しかもイエスは彼のあるべき姿を見通されていたのであつた。今は、シモンはケパと呼ばれるに適わしくはない。けれども、時が来るならば、その時彼シモンはケパである事を自覚するであろう。その為には彼は多くの事を学び、多くの事を経験しなければならぬ。そのような期待と見通しの下にイエスは敢て彼シモン

をケパと呼び給うたのであつた。

ヨハネとヤコブの二人もある時イエスからボアネルゲという名を与えられた(マルコ三・一七)。恐らくは此の兄弟は生来の激しきの故に「雷の子」と呼ばれるに適切であつたであろう。けれどもやがて彼等殊にヨハネはボアネルゲと対称的ともいうべき静けさにまで転換されて行つた。それは単なる静けさではなくて、神の子イエスに顕れた比類を絶した愛が、彼を捉え、屈服せしめ、その生来の激情をも完全に粉碎し去つて、唯深き信頼をもつて彼と彼を遣わし給うた父なる神の中に生きるものとされたもののみがもつ静けさであり、平安であつた。

事は丁度逆な形で起つたけれども、シモンについても新しい転換が訪れねばならなかつた。彼自らは幾度か主に對して自己のゆるがぬ信頼を告白し、主の為ならばあらゆる苦難も物の数ではない事を

断言したにも拘らず、その主が十字架の死を遂げる迄如何に屢々彼の人間的な誠実さと人間的な信頼とはイエスを裏切つた事であつたか。イエスを裏切つたのみではない。それは彼自身を更に深く裏切つたのであつた。

しかしやがて彼にも、新しい人間の形成される日が訪れた。それはあの十字架と復活と―あれ程に彼にとつてはその到来が恐ろしく、厭わしく思われ、その為に主に向つて彼の心からの忠告を敢て申述べざるを得なかつた(マタイ一六・二一―二三)事の実現―を通して彼の衷に迫り來つた強大な神の愛に觸れる事によつてのみ起り得た人間形成むしる新生であつた。あのカルバリの丘に暗雲低迷の中に立っている十字架の上に、我等の罪を一身に担いつゝ苦しみと惨めさとの底に耐え給うた主を人々の眼から遙に離れた所より望み見、やがて又鮮かに死より望み見、やがて罪に勝ち給うた主イエスを

新しく彼自らの主として仰ぐ事を許された時を境として、もはや旧き彼は生きる事が出来なくされたのであつた。今や新しい彼、彼自身ではなくて復活し給うたキリストがその衷に生きる彼が生れたのである。聖霊の降臨（使徒行伝二章）というあの特別な経験はその事の確証であつたと思われる。

その時以来、彼のキリスト・イエスに対する信頼は正しくケパという名で呼ばれるに適わしい揺ぎないものときれたのであつた。

甦り給うた主と彼との応答を記したヨハネ伝の最後の数節は強く私たちの心を打つ。

此処で主は彼に向つて、「ヨハネの子シモンよ、あなたは私を愛するか」と三度繰返して訊ねられた。その時彼はその主に対する信頼が旧き己のそれと全く違つたものである事を自覚しつゝ、「主よ、あなたはすべてを御存じです。わたしがあなたを愛していることは、おわかりになつてい

ます。」と深い謙遜に充ちた告白を申し上げる事が出来たのであつた。

此の信頼、此のケパこそ、イエス・キリストの事実の上に建てられた「キリストの体」＝エクレシヤの隅の石として如何に適わしくある事か。

悪魔の街に向いて

半田信子

仇なる悪魔は、ほゆる獅子のごとく歴廻りて、呑むべきものを尋ねている。（ペテロ前五・八）

一人でも多くの者を亡びにおとし入れようとして。

その誘いは、未だ信仰を持つていない者に対してよりも、私たちキリスト者に対する方が、より強いのではないのでしょうか。こうした末の世にあつて、その働く時のいくらかもないことを知っている悪魔は、必死となつて働きかけて来る。或る時はそのときすぎました爪をかくし、美しいさ

さやきをもつて、又或る時は露骨に脅迫して来る時もある。あらゆる機会をみつけて、巧妙に働きかけて来るのである。エバが蛇にまどわされた時の様に人間の弱点をうまくつかんで。見るによく、聞くによく、そして所有の欲、肉の欲・・・。

終日所あらば、恵の座から引きづり降ろそうとすきをかゞう此の悪魔の術より逃れる為に、又勝を得る為に、神の武器をもつてよろえと聖書は教えている。

エペソ書六章

十一、悪魔の術に向いて立ち得んために、神の武器をもつて鎧うべし。

十二、我らは血肉と戦うにあらず、政治、権威、この世の暗黒を掌どるもの、天の処にある悪の炅と戦うなり。

十三、此の故に神の武器を執れ、汝ら悪しき日に遭いて仇に立ち向い、凡てのことを成就して立ち得ん為なり。

十四、帯―誠 駒当―正義
十五、靴―平和の福音の備

十六、盾―信仰

十七、胄―救

劍―御炅―神の言

十八、常にさまざまの祈りと願とをなし、御炅によりて祈りまた目を覚して凡ての聖徒のためにも願いて倦まざれ

十九、又（わが）口を開く時云を賜り憚らずして福音の奥義を示し、語るべきところを憚らず語り得る様に（我がためにも）祈れ

昔、イエス様が荒野に導かれ悪魔に試みられ給うた時、みごとに勝利を得給うたことは余りにも有名である。普通の誘惑では敵わないことを知つた悪魔は、聖書の言葉をもつて誘惑をしている。しかし、イエス様は更に適切な聖言をもつて勝利を得給うた。悪魔は時折、まことしやかにそれが神様から出た事の様に思い込ませようとして聖書を用い、美わしい言葉をもつて迫つて来る。そういう時に、キリストにならつて、聖言の剣をふりかざし勝利を得たいものである。

迷 夢

松本文助

それ十字架の言は亡ぶる者には愚なれど救わるゝ我らには神の能力なり（哥前・一・十八）

私の尊敬する或る老婦人は「一日に少くとも三章は読む様にしています。生命の泉がかれてしまいますものね」と何処に居ても、どんな時にも時間をみつけては聖書に親しんで居られる。そして宣教の第一戦で働いて居られるが、その時その時、本当に適切なみことばを用いて悲しめる者を慰め、痛める者を力づけ、福音の証を立て、居られるのである。

常に祈りてひもどく神の言は力強い武器となつて悪魔との戦に勝利を与えるものであり、又憚らずして福音を述べ伝うる事を得しめるのである。

なんぢの聖言はわが足の燈火、わが路の光なり
（詩篇一一九・一〇五）

庭の草木や芝生のうらゝかな早春の日射しを窓越にみとれていると、いつとはなしに今年の新入園児の少なくないことから色々と考えが走った。

地理的に悪くまたその上近くの小学校付属幼稚園が拡張されたので、少いのも止むを得ないとおもふものの、四月には第十周年を迎えようとするだけに気の弱い私は一抹の淋しさを感じるのであった。

自分達の保育が悪いのかしら・・・と反省もさせられる。勿論充分とはおもえない。然し他の幼稚園にはないものを持つている。それは「幼児らを許せ、我に來るを止むな、天国は斯のとき者の国なり」（マタイ一九の一四）というイエスの御心を以て、神様への信従、そして十字架を仰ぎ見ること、この事である。き章もひまわりの花を型

とつた。ひまわりの花が太陽に向つて咲く如く、神様に何時も心の顔を向けて生活出来る様にと願うからである。そして「汝の少き日に汝の造主を記えよ（伝道の書一二・一）」此の聖言に此の事業の尊さをおもひ無限の慰藉が与えられたのであった。

然しこれは独りよがりのことである。この世の一般人は之を解し得ない。のみならず基督教に対しては未だに異端視しているのである。今や此の世は道德も眞の宗教も其の生活の基盤から離脱しつつある。この世の時勢をおもうと全くさかまく濁流の如く目に映るのであった。無限の慰藉も忽ち失望に落ちた。濁流の中に何の意味もない一本の葦の如く見えたのであった。そしてこの盛なる濁流を誰が停止し浄化し得られるか。誰にも出来ないのだ。私の立場は実におこがましいことである。この濁流を見よ。お前が少しでも園児の増加を望むなれば、此の世と同調しなければ

ばーとおもつたとたん、大馬鹿者奴！横面をいやと云うほど打たれた様に感じた。

そして、イエス・キリストによつて停止し浄化出来るのだ。眞理のみは可能だ。との声が心底に強く響いたのであった。

新約外典イエスの誕生の記事が実感された。

「かくて我れヨセフ、歩むともなく歩みたり。我れ上空を仰ぎ空の愕然たるを見たり。我れ天の上極を眺め其固定し空の鳥の静止せるを見たり。云々」

イエスの誕生を以て、天地の運行が一時停止するほどの重大事件である。（聖書知識第十二号）

実に歴史的事実はイエスの誕生に依つて完全に旧約時代に終止符をつけ、新約の福音時代に変革したのである。一人のルーテルがイエス・キリストを信仰したとき当時の大なる濁流カトリックに抵抗し新教が誕生したのであった。

此の世の濁流如何に大であつても、之を停止し浄化し得ることは「人には能はねど神は凡ての事を為し得るなり」(マタイ一九の二六)私は迷夢が醒めて、平安と希望が湧き出るのであつた。

従順と反抗

人が、それぞれ与えられた人生コースを歩んでゆく時、極く大雑把に言つて、二つの態度があるであらう。一つは「より従順なもの」であり、他の一つは「より反抗的なもの」である。然し、厳密な意味で、「従順のみ」「反抗のみ」の生き方というものはあり得ない。何故なら、すべてに反抗的に見えるものでも、(例え自分自身に反抗的なものでも)彼は自分の信據する何かに従つてゐるのである。若し従う対象を何も持たないものがあれば、その反抗は意味を持たないし、それは眞の反抗ではない。従つて従順と

反抗との関係は、必ず従順が先であり反抗があつてである。或は従順が本で反抗は末と云えるのである。

従順は、一般的には消極的な、女性的徳性の一つであると考えられてゐる。過去何百年かに亘つて、女性の歩んで来た道が、ロボットの忍従にあつたことを人は云う。解放という言葉が、好んで用いられるのは、このような消極的、退嬰的、過去の女性的な屈従に対する反撥と、憤りに基を置かぬ知れない。反抗がより社会的な意味を持ち、むしろ進歩や革新と同義語のように扱われるのもその為であらう。

然し、既に我々が知つたように、人は必ず何ものかに従つてゐる。封建時代が、厳しい身分関係の隷属の中に特徴を持つとすれば、現代は軽薄な流行を追い求める垂流時代と云つて云い過ぎでないであらう。これは決して女性の服装に限つたことではない。政治にも教育にも、独立

性の強い筈の芸術にもこのことは云えるのである。すべての責任を資本主義の悪らつな利じゅん追及に帰すること、愚かなことである。むしろ社会主義の大国が、経済的安定の代償として、政治的、思想的従順を強制してゐるのである。

眞に従うべきものが何であるかを解しない時、人はこのような愚かを繰り返して止む時がない。

キリスト教が、教会の中に閉ぢこめられた時、やはり同様であつた。寛容と従順が、単なる現実肯定としか理解されないような、骨抜きにされたキリスト教に何の意味があるだろう。

然し、人は眞に従うものを持つ時、むしろ激しいたゝかいを意識しないわけにいかぬであらう。主にあつて、神に対する従順を徹底すればする程、世俗への反抗は決定的となるのである。寛容は妥協とは根本的に質を異にしてゐる。

若し聖書を一度手にしたところのある者が、奇蹟や、理解し難いある種の用語の故に、全巻を貫いてゐる唯一者への従順と、世俗を裳つて迫つてくる悪魔とのたゝかひを見落すなら、彼は何も見ていないのである。

神に対する従順と、悪魔に対する反抗が、凄まじい眞実として画かれてゆく聖書の結論は、唯一者の究極絶対の勝利と、従順のもたらす愕くべき歎喟と寛容への限りなき讃歌に外ならない。

この眞実にふれ得たものはまことに幸福である。平安は、如何なる境遇、如何なる現実の中にあつても、固く約束されているからである。

(半田)

ロマ書断片

――切つて捨てて――

義を追い求めなかつた異邦人は、義、すなわち、信仰に

よる義を得た。しかし義の律法を追い求めていたイスラエルは、その律法に達しなかった。なぜであるか。信仰によらないで、行いによって得られるかのように、追い求めたからである。(ロマ九・三〇～三二)

信仰による行為

信仰によらない行為

○外から見れば、全く同じと思われる行為も、信仰による行いは恵みであるが、信仰によらない行いは、律法であり、義務である。日曜の礼拝に出席することを例にとると、信仰による者には、それが此の世に於ける最上のよるこびであり、励ましである。然し信仰によらないものは、それが義務となり、負担となる。(ロマ一一・六～七参照)

○信仰によらず、洗礼(割礼)の儀式によつてクリスチャン(神の子)であると自認する者は、形式の上で義人となること(義の律法)を追い求めたイスラエルである。

形式的なバタ臭い垂流的クリスチャンになることを嫌つて、唯恵みを信じて救われた者は、義を追い求めなかつた異邦人である。

○然しこのような形式的クリスチャンが、世の指摘を受けるようになった為に、反つて、ルッターが立ち、内村が立つことが出来た。免罪符によらず、洗礼によらず、信仰のみによつて、彼らは眞の救いにあずかることが出来た。そして新教が起り、カトリックは奮起し、無教会が起つてプロテスタントは恥かしめを受け、立ち直るチャンスを与えられた。(ロマ一一・一一～一二)

○然し、だからと云つて、新教徒や無教会に誇るべきところがあるかと云うと何もない。彼らは野のオリブである。カトリックがその不信仰によつて枝を切りとられた元木であるように、新教もその形式主義によつて、無教会に枝を接がれた。だからもし無教会が誇れば、神はカトリック

クや新教を切つて棄てたように無教会をも切つて棄てるであろう。もしカトリックやプロテスタントが、不信仰を続けなければ、彼らも再び神の国をつぐことを許されるのである。(ロマ一一・一三～一六)

(半田)

後記

朝目をさますと、その明るさが如何にも春らしい気配に満ちているのがうれしい。

屋根の草春曙に出て仰ぐ

秋櫻子にそんな句があつたのを思い起す。芝生を歩く

と、雑草の若芽が、生れたばかりの柔い緑を光に向けてつゝまじやかに伸ばし始めている。踏みつけるのはすまないようだ。バラやハマナスの赤い芽はふくらみ、黄梅は小さい花びらをホロホロと散らす。

何かしら人間だけが汚ならしい冬服を着て、ストーブにかざりついて寒い寒いと不平

を云つてゐるみたいだ。何事につけリクツづく未練がましいのも、人間界のみの光景であろう。自然の美しさや恵みを、もつと単純に素直に受け入れたらどうであろうか。季節ほど神さまの愛の豊かさを教えてくれるものはないのだから・・・。(半田)

キリスト教講演会

とき 三月三十一日

午後七時

場所 水戸市天王町

医師会館

講師 諏訪熊太郎先生

会費 三十円

主催 水戸無教会

昭和三十一年三月 発行
水戸無教会第十二号

実費十円千共

編集兼印刷人 半田梅雄

発行人 松本文助

発行所 水戸市東原町四六四二

水戸幼稚園内

水戸無教会

